

# リスクと「多様な主体」

奈良由美子(放送大学)

[narayumi@ouj.ac.jp](mailto:narayumi@ouj.ac.jp)

2016年6月2日

研究開発戦略専門調査会第4回会合

# 1. 「多様な主体」の意義と問題

## ■ 多様な主体(の連携)の今日的意義

- リスクの発生局面と管理局面において関与
- resilienceの4Rの向上 (robustness、rapidity、redundancy、resourcefulness)
- 防災、食品安全、消費者安全、・・・サイバーセキュリティ

## ■ サイバーセキュリティに関わるリスクと多様な主体

- サイバーにおける being とacting には便益、そしてもれなくリスク
- 行政、事業者、研究者、一般利用者(国民)、メディア
- サイバーセキュリティ戦略の基本原則 「⑤多様な主体の連携」

## ■ サイバーセキュリティにおける「多様な主体の連携」の要件

- ①リスク概念を共有する(これは結構難しい)
- ②主体ごとにリスクと便益のとらえ方(懸念と期待)が異なることを、お互いが理解する

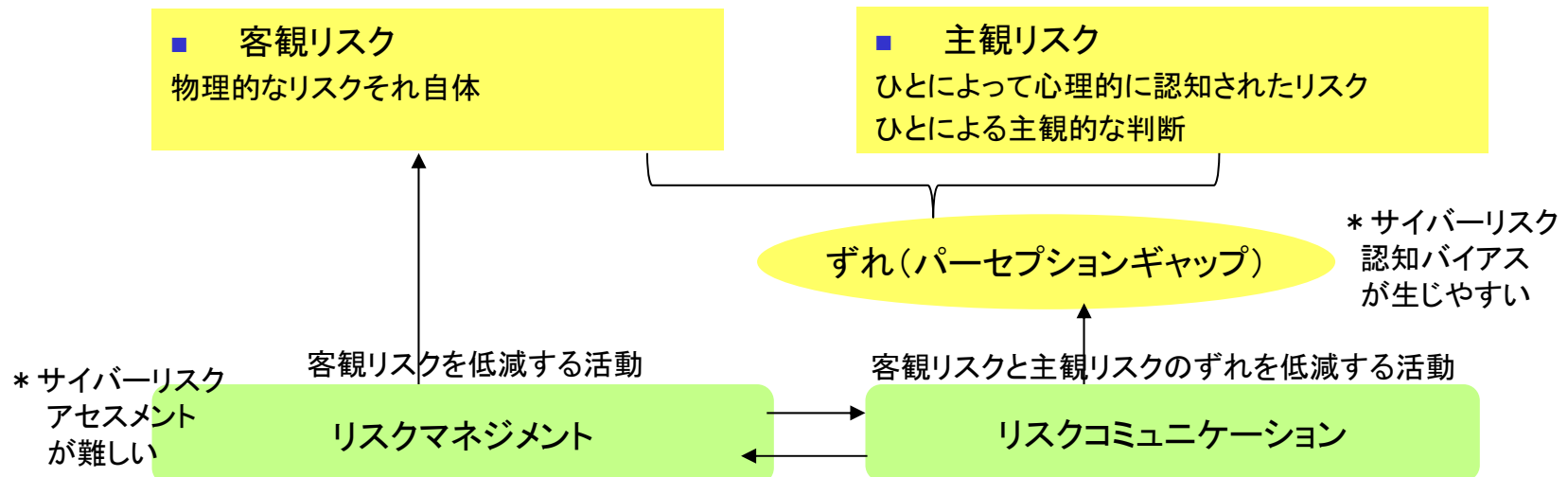
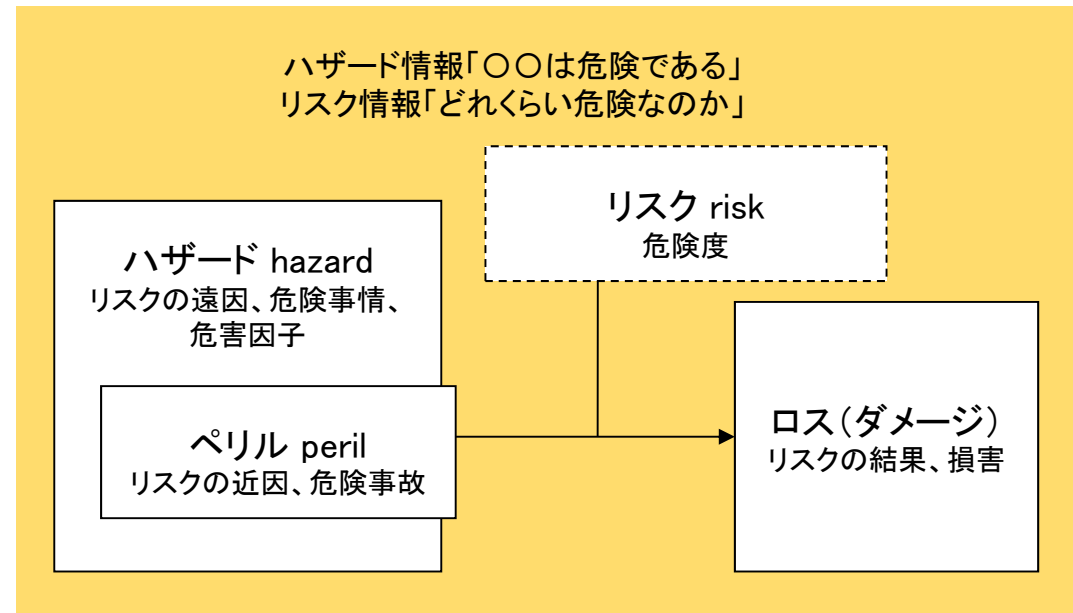
- 行政、事業者、研究者、一般利用者、メディアといった立場により異なる(主要価値により、情報量および情報処理能力により、・・・)
- 同じ業界内でも異なる(事業者:業種、体力により、・・・。研究者:分野により、・・・)
- 1つの組織内でも異なる(部署により、階層により、担当者により・・・)
- 同じ一般利用者(国民)でも(年齢、性別、知識、経済状況、利用経験により・・・)

- ③その多様性を吸収するしくみ(ないしプラットフォーム)をつくる

## 2. リスク概念の基本と実際

### リスク(risk)

- 人間の生命や健康、資産ならびにその環境に望ましくない結果をもたらす可能性
- 目的に対する不確かさの影響 (JIS Q 31000:2010 [ISO 31000:2009])
- 本質は不確実性
- ゼロリスクは不可能
- 結果のひどさとその発生の起こりやすさの組合せ (強度 × 頻度)
- リスクの客体 (身体、財産、機械、システム、データ、ネットワーク、品質、組織、制度、生物種など)



### 3. リスクと認知バイアス

パーセプションギャップはなぜ生じるのか？

不確実性をはらむ対象について、制約を抱えるなかで情報処理が行うとき、その過程にはリスクの認知バイアスが生じる。

#### 認知能力の制約とヒューリスティック

- 「ヒューリスティック」: 不確かな状況下で判断や決定を行う際に用いる、簡便で直観的な方略
- ヒューリスティックの意義:  
リスクについての判断や決定は不確かな状況下で。状況の持ちうる多様性すべてに必要な情報を集め分析・検討するには大きな認知的コスト。ヒューリスティックは認知コストを節約できる。  
(ヒューリスティック ↔ アルゴリズム)
- ヒューリスティックの種類  
利用可能性ヒューリスティック、代表性ヒューリスティック、係留と調整ヒューリスティック、感情ヒューリスティック...

#### 一般的なリスク認知バイアス

- ①正常性バイアス  
(異常事態があっても「これは正常な範囲内だ」として心理的な安定を保とうとする)
- ②楽観主義バイアス  
(自分の都合の良いようにリスクを歪めてとらえる)
- ③カタストロフィー・バイアス
- ④ベテラン・バイアス
- ⑤バージン・バイアス
- ⑥同調性バイアス

## リスク事象の特性にもとづく認知バイアス

あるリスク事象について、それに何か特定の性質が伴っていると感じられる時、客観的な大きさには関係なくリスクの大きさの程度の認知が高まる(低くなる)ことがある。

特性項目	内容
自発性	非自発的に負担することになるリスクは過大視され、自発的なかわりで生じるリスクは過小視される
公平性	誰にでも平等にふりかかるのではなく、いっぽうに利益がもたらされ、他方に損害がもたらされる場合にはリスクは大きく認識される
制御可能性	個人でコントロールできない場合、リスクは過大視される
未来への影響	次世代を含む将来への影響の可能性があるリスク事象は、そうでないものより過大視される
即効性	リスクの結果がすぐに出ず悪影響が遅れて現れる場合にリスクは過大視される
大惨事の可能性	一度の事故・事件・災害で多くの被害者が出る場合、リスクは過大視される
結末の重大さ	死につながるリスク事象は、そうでないものより過大視される
苦痛の付加	普通でない死に方をしたり苦しみながら死んだりするような場合、リスクは過大視される
便益の明確さ	その事象のもたらす便益が明確でない場合には、明確な場合と比べてリスクは大きいと判断される
復元可能性	結果としての損害を元の状態に戻せないと、そのリスクに対する認識は高まる
しくみについての理解	発生の背景や進行過程、また損害に至る過程が見えない事象のリスクは過大視される
なじみ	あまり知られていない事象のリスクは、よく知られているものより過大視される
発生源	人為的に発生する人工のリスクは、自然発生的な天然に存在するリスクよりも過大視される
新しさ	新しいリスクは、古くからあるものよりも過大視される
距離感	見知らない人のリスクよりも、身近な人のリスクは大きく認識される
情報の一貫性	複数の情報源から矛盾する情報が伝わる場合、情報を受ける側の人びとはリスクを過大視する。また、同一の情報源から矛盾した情報が伝わる場合にもリスクの過大評価が生じる
信頼性	そのリスクに関わっている機関に対する信頼性が小さいと判断された場合にリスクは過大視される

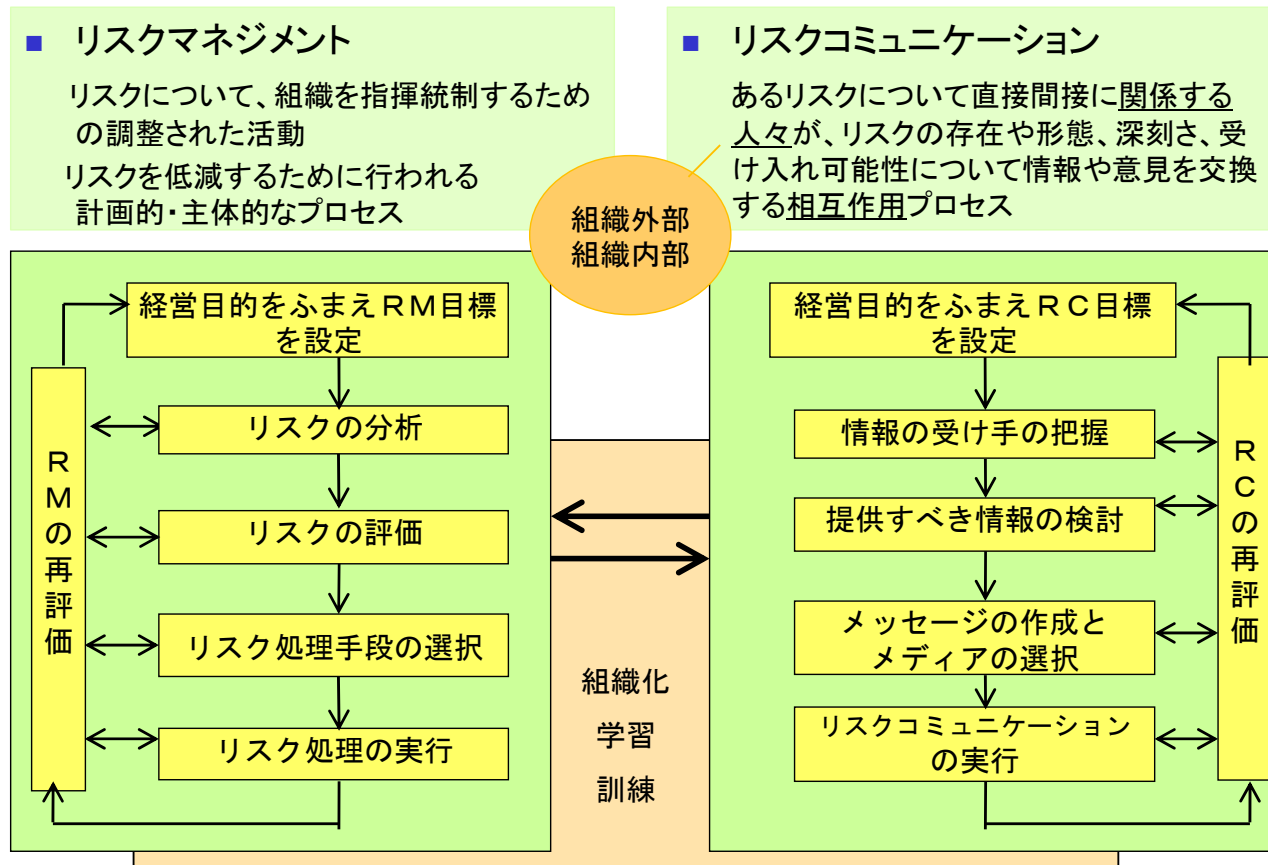
# 4. リスクマネジメントとリスクコミュニケーション、リスクガバナンス

当該組織によるいわば部分最適な対処としてのリスクマネジメント

→リスクの関係者とのリスクコミュニケーションと連動したリスクマネジメント

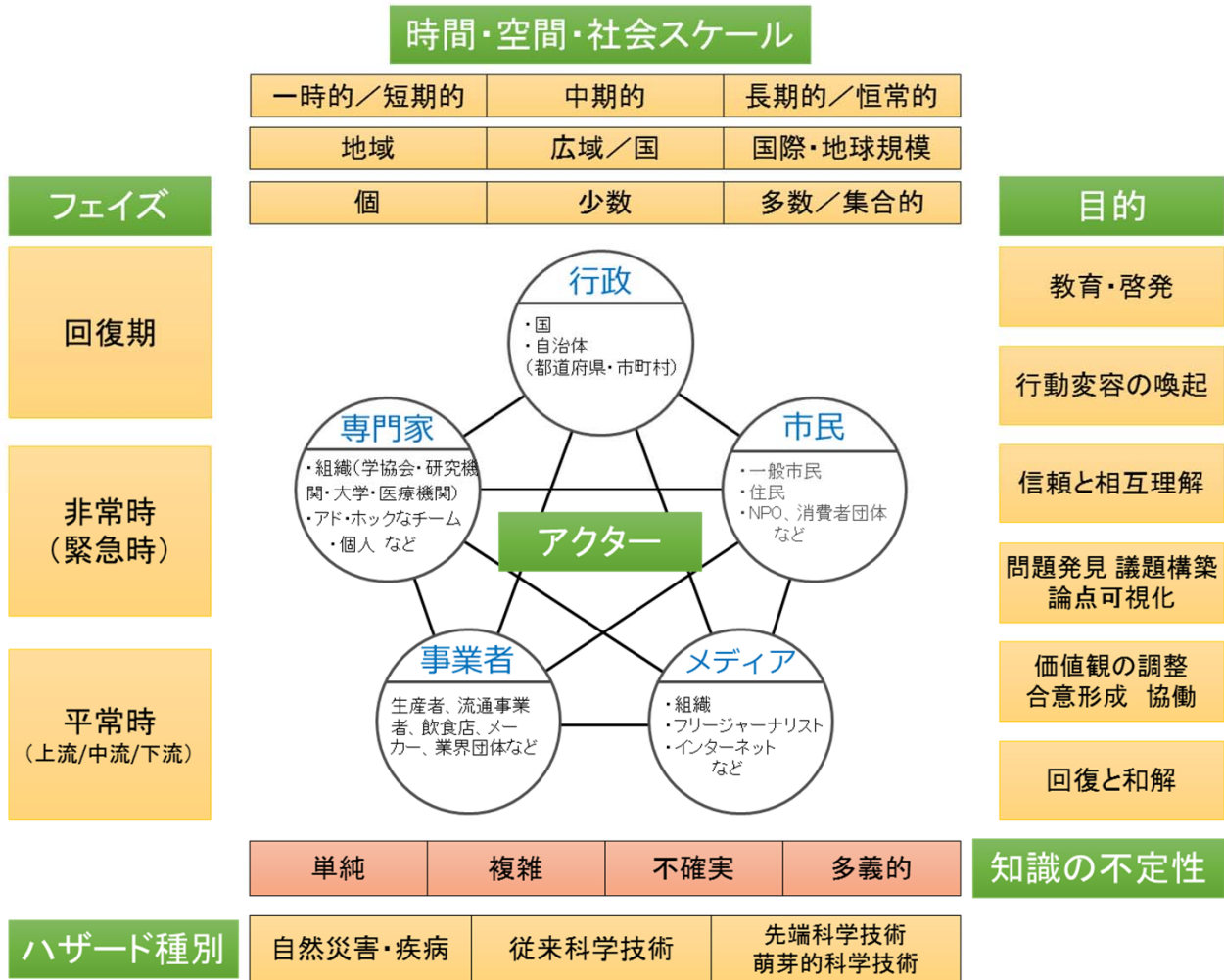
→リスクガバナンス:リスクの発生や対処の関与者となる主体が、互いの価値や利害のコンフリクトや資源の制約のもと、社会としてどのリスクにどのように対処すべきか、すなわち全体最適としてのリスク対処を行う

リスクマネジメントとリスクコミュニケーション(ともにPDCAサイクル)



# リスクのより適切なマネジメントに資するリスクコミュニケーション

- リスクコミュニケーションの目的 (International Risk Governance Council)
  - ◆ ①リスクとその対処法に関する教育・啓発
  - ◆ ②リスクに関する訓練と行動変容の喚起
  - ◆ ③リスク評価・リスク管理機関等に対する信頼の醸成
  - ◆ ④リスクに関わる意思決定への利害関係者や公衆の参加と紛争解決



## リスクコミュニケーションの類型枠組み

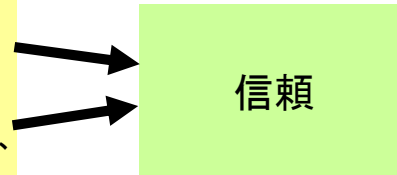
出所: 文部科学省安全・安心科学技術及び社会連携委員会(2014)『リスクコミュニケーションの推進方策』

# 信頼の確保

- ①リスク情報に対する信頼
- ②リスク管理者(情報発信者)に対する信頼
- ③リスクコミュニケーションそのものに対する信頼

## 伝統的信頼モデル

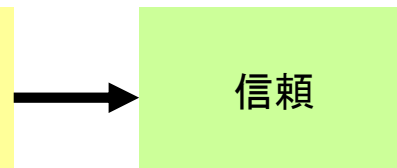
- リスク管理者の「専門的能力」  
専門知識、専門的技術力、経験、資格 など
- リスク管理者の「姿勢」  
まじめさ、コミットメント、熱心さ、公正さ、中立性、客観性、一貫性、正直さ、透明性、誠実性、相手への配慮、思いやりなど



相手がリスク管理者に対してその専門的能力の高さを評価し、また姿勢の好ましさを認知したときに、リスク管理者は信頼される。

## 主要価値類似性モデル

- リスク管理者と自らの「主要価値」の類似性  
(提示されたリスク問題の見立て方や、そこで何を重視するか、どのような結果を選考するか)



当該リスクに関連して重要な価値を自分と共有していると思われる他者を信頼する。この場合、信頼は社会的現実を共有できる他者に対して形成されやすい。

- 専門家でない関係者に意見を述べる機会がある
- その意見が意思決定に反映されている
- 意思決定プロセスに利害関係者が参加している
- 意思決定プロセスに透明性がある
- 一般市民は「誰が、どのような根拠で決めたか」の説明を求めている
- 説明を含めた情報のやりとりに適時性がある



# リスクガバナンス

「社会としてどのリスクにどのように対処すべきか」

リスクに対する社会的判断のためのしくみや具体的制度を設計し、社会の中の多様な主体(市民、様々な分野の専門家、様々なレベルの政府、様々なレベルの団体など)が協働しながらリスク問題に対処

様々なリスクに対する問題解決の活動における、能動的参加者(ステークホルダー)、責務、規則、意思決定の構造、情報の蓄積・解析・開示・運用のすべてを有機的に包含し有効に機能するしくみの総体

- リスクへの対処を人任せにせず社会のステークホルダーが多様な情報及び見方の共有を図り、対話・共創してゆく。
- その前提: 互いの違いの認識。
- さらにその前提: ガバナンスの可視化・透明化。

- ガバナンスの高度化のためには各主体のリテラシーの向上

リスクガバナンスの枠組  
(Introduction of the IRGC Risk Governance Framework, IRGC, 2005 に加筆)

